



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1937, 17(193): 274-274

ISSUE DATE:

1937-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167458>

RIGHT:

花 山 だ よ り

□老人星氏の後を繼いで、據どころなく引受けたこの1頁、同氏の如き妙句を奮發する筆を持合はさないのには遺憾至極。だが、兎に角、昨今の其處彼處の大小話題を拾つて漫步してみやう。

□小澤氏發見の彗星が中央局まで耳聳立て確報を期待して居たのに、遂ひに行方不明とは「残念!!」の2字に終つて仕舞つた。然し、昨今の邦人天體發見史上に一意氣を示すものとして、日本流の感激を發揮した。

□来る6月8日の南太平洋日食の第一線に觀測陣を張るため、銳意準備中だつた山本教授始め、柴田、堀井兩氏は、既報通り去る3月29日夜、盛大な見送りを受けて出發東上された。これに先立ち26日夜、市内の料亭で天文關係の先輩、職員一同は晴れの首途を祝ふて、賑やかな春宵の宴を張つた事だつた。——ペル1日食觀測隊の快報を期待しつゝ。

□溫順暖冬の後は、春の彼岸を迎へても、屢々、寒風の中に花を眺める矛盾もあつて、陽氣は立後れの感はあるが、昨今、天文臺道路の其處彼處の櫻花は例年にも増して、威勢のよい満開を見せてゐる。——やがて、嵐を呼んで、一夜に散り敷く時も来るだらうに、飽かず眺めて、悦ぶ人々の心は美しい。——花山道路の名物「鶯」が、好い啼聲を放つてゐる。俗塵を外に秋近くまで谷間に歌ふ、可憐なリズムは、尙恨めしい詩人の横笛か？ 星を友とし、宇宙を心とすれどもやはり人間なれば詮方なく、聴くは「法華經」なれば忝なし。

□巷間を湧き上らせた亞歐連絡飛行の「神風」調が、花山にも漂ふて、晝食後の話題を賑はし、飛行時間の算出計略に各々名案を投じた由。蓋し、成功裡に飛行終了した事は日本の一技術の目醒しい發展ぶりを示して同慶至極。

□4月上旬、また一新彗星發見の入電!! 本年に入つて第5番目、彗星の豐年、深夜には火星も接近して來た。5月の水星の太陽面經過も近い。今年の天文界も多忙なことだ。(4月10日 花星人記)